

## 博士課程修了者を送る

理学系研究科 委員長

和田 昭 允

大学院での過程で、皆さんは知的好奇心が満たされるすばらしい一瞬を味わったに違いないと思います。本日、私が皆さんに特に心からお目出とうと言いたいのはそのことに対してなのです。

長い間頭の中にくすぶっていた疑問が、いろいろと実験したり考えを積みあげてゆくうちに、霧が晴れるように解決されるというあのすばらしい瞬間を一度ならず経験されたに違いありません。それがまたまたたく間に雲に閉ざされ、絶望的な状況となり、その後にもまた曙光が見えるという繰り返しを経験された方も多いのではないのでしょうか。アインシュタインの伝記に次のような1節があります。“やっと解決ができたと思ふと、目を輝かして、友に、成功近きに在りと告げる。翌日になると、打ち萎れて、過去の試みは凡て間違っていたと打ち明ける。こんな風にして幾月か経て、遂に、もう止めると、と友に語ったが、その明るる日、役所の退屈な仕事の終るのを待ち兼ねて、ベッソーに、いよいよ本道に出た、と昂奮してささやいたといふ。即ち「同時刻の相対性」を発見したのであった。その後5週間で、特殊相対性理論の論文が出来上がったといふ。”(桑木或雄著“アインシュタイン伝”改造選書)

これこそ研究者に与えられた醍醐味なのです。まさかそんな人はいないと思いますが、もし皆さんの中に、研究の過程でこのすばらしい心のときめきを一度も経験されなかった方があったら、その人は残念ながらロクな研究者にはなれませんか

ら他の道へ進むことをお勧めします。その人は、研究に絶対必要な探求心という推進器を持たない船に乗ってしまったのです。一生は一度しかなく、まだ手遅れでもありませんから、出来るだけ早く、もっと心を振るい立たせる他の仕事に変わるのが身のためです。

自然科学とは世界中の研究者が協力して積み上げている知的資産の膨大な蓄積です。学位論文が公表されることによって、皆さんは人類が書きつづけているこの大著作に新しい1行を加えたことになります。そのうち1パラグラフ、1ページ、あるいは1章を書くことになるでしょうし、ぜひ1冊といった大分のものを書くようになって下さい。

わが国が技術大国になった今日、国際社会から、“日本は知識の蓄積には貢献せず、使うだけで金もうけしている”と言われてしています。その当否はともかくとして、日本人の貢献が少ないように見えるのも確かかのようにです。それは前記の大著作という例でいいますと、1行、1節の貢献は多いのですが、1章あるいは1冊の基盤となる流れがないために、日本人の寄与が少ないように思われるのではないのでしょうか。私自身も反省するのですが、わが国の自然科学の研究には物語性、つまり大河ドラマのような息の長いストーリーが欠けているように思われます。これは科学の歴史が欧米に比べればまだ浅く、知的好奇心の対象が目先の小さなことに限られがちで、それを大きな、より

根本的なものに向けるという伝統や習慣があまりないからかもしれません。

研究のストーリーを自分なりに作ると、それによってもっと広い範囲の好奇心が湧き、それがまた大きな研究のシナリオを作る推進力になるといって、自己発展的サイクルが出来てきます。

皆さんはぜひ、自分の研究ストーリーを組みた

てる努力をして下さい。未知のものへの好奇心によってそれを大きく膨らませて下さい。そして、人類の科学の1ページ1ページを着実に書いて行くことをお願い致します。

21世紀はあなた方の世紀です。皆さんの研究の発展と御多幸を祈ります。